○３番（山口裕子君）〔登壇〕

最終日の最後、４番目になりました。登壇の許可をいただきましたので、ただいまより山口裕子の一般質問を始めさせていただきます。

本当に皆さんお疲れだと思いますので、簡潔に質問を進めさせていただきます。

本日の質問は、昨日の上野議員と相談していたわけじゃないんですが、たまたま子育て支援ということで重なりました。しかし、これは私が大切にしている問題ですので、割愛はさせていただきません。

２番目が市民の安心・安全についてですね。これも重複しておりますが、大切なところを質問させていただきます。よろしくお願いいたします。

本当に今回の議会は選挙の結果とか、そういう党のマニフェストとか、いろんな形で話題になっておりますが、今回私が子育て支援について上げさせていただいたのは、各党ですね、いろんな子育て支援に関するマニフェストが話題になっておりました。

自民党は、３歳、５歳児の幼児教育費、幼稚園、保育園料を段階的に軽減し、３年目から無償化。子育てに配慮した低所得者支援策、給付つき税額控除など。３番目、子育て期の短時間勤務の義務化。４番目が、高校生、大学生向けの就学援助制度創設。低所得者の授業料無償化に対して、民主党のほうが、中学卒業まで子ども１人当たり月額２万6,000円の子ども手当支給、２番目が出産育児一時金、現在38万円のところを55万円に。３番目、生活保護の母子加算復活、４番目が公立高校生の授業料無償化、私立高校生には年間12万円、低所得世帯は24万円助成、各党いろいろな形で子育て支援対策が上げられておりました。民主党のほうは本当に金額がはっきりと打ち出されていましたが、私も27年間ですね、今、下の子が16歳で４人の子育てをしておりますが、この間、本当に子育ての環境が大きく変わってきました。

このマニフェストが出た時点で、やはりいろんな声がありました。これは８月11日の佐賀新聞に載っていた分と思いますが、やはり収入がふえるのはうれしい。ただ、簡単に現金支給するイメージがあって、親が自分たちのために使ってしまいそうな軽さがあるのがひっかかるという市民の声も載っておりました。

私も、この数年といいますか、本当に必要な子育て支援は何だろうかというふうに子育ての仲間とか、いろんな方とお話をしたり聞いたりするんですが、最近その金銭的な支援とか、本当に必要な、だれでもがお金は幾らでも欲しいわけですが、支援の仕方というか、あり方はもう少し問わないといけないんじゃないかというふうに私は思うのですが、市長は今、このような子育て支援の中、どのように武雄の子育て環境を支援していきたいと思っておられるのか、質問いたしたいと思います。お答えお願いいたします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

答弁をいたします。

恐らくおっしゃる、昔、10年ぐらい前と今とだと全然違って、例えば、10年前というのは、１つの政策をすれば、それがきちんと芽が出てきたというところですけど、今、議員御案内のとおり、さまざまな家庭環境があります。例えば、一人親の方々であったり、あとは、これだけ不景気になって、本来専業主婦の方が働かなければいけないということがあったり、そして、昔は、私はそうでしたけど、３世代、じいちゃん、ばあちゃんと一緒に住んでいた。今、この武雄でも核家族が進んでおりますので、非常に１つの政策をしても余り効果が出てこない。だから、きめ細かい政策をちゃんとしなきゃいけないということで、今私たちが心がけているのは、これは、こども部が今一生懸命やっておりますけれども、例えば、子育て総合支援センターにお見えの保護者の皆さんたちの悩みを聞いたりとか、あるいは市役所の１階にお母さん方がよくお見えになっています。私も時間があれば、下におりて話を聞くようにはしておりますけれども、そういう声をまず聞くことがすごく大事なんだなと。そして、あるお母さんが私に対しておっしゃったのは、今までもやもやしとったけど――僕は、それはちょっと無理ですねというとがあったとですよ。そいばってん、すっきりしたと。それは何でですかと言うたら、いや、もう市長さんに言うただけですっきりしたということだったので、やはり多聞第一というのは大事なんだなということを思いました。そういったことで、なるべくきちんと聞いて、そして、きめの細かい政策をしていくということが大事なんだなというふうに思っております。

そのような中で、私は今回の民主党政権の手当ですよね、これを予算だけ考えると、日本は、これは前の議会で申し上げたと思いますけれども、ＧＤＰの中で、たった４％しか使っていないんですね、子育て関係の。これは先進国からすると異様な数字です。ですので、ちょっとどこに、直接手当がいいのか、間接がいいのかは別にして、そこに各政党が――これは自民党さんもそうですけれども、各政党が目を向けたということに関しては、今回の選挙というのは、子育て支援という意味では意味があったのかなというふうに認識をしております。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

子育て総合支援センターとキッズステーションという居場所ですね、それは私も要望して、そういう形になったのは本当に喜ばしいことで、その件に関してまたちょっと詳しくは後で質問したいところがあるんですが、やはり今回選挙に備えてのときの記事の１つで、佐賀市子育て支援センターのセンター長さんも、やっぱり経済的負担を軽減するだけで子育て世代が楽になるかといえばそうではないという意見も書かれてありまして、やはり現場にいる方

は、本当に子育ての悩みを周囲に相談できずに、一人で抱え込む母親を見るにつけ、同じ目線で話を聞いたり、助言できる人材の確保と、いつでも駆け込むことができる居場所づくりの必要性を痛感する。また、それから金銭的な支援とともに、子育て世代が安心できる基盤整備を提示されて、そんな政策を具体的に示せば共感する保護者は多いのではないかというふうにこの所長さんはおっしゃっています。私も全くそのとおりだと思うんですね。やはり安心して子育てができるというか、不安がないということは、一人の子育てをしていて、ああ、次の子もそろそろ欲しいなというふうに、少子化対策に一番つながると思うんですね。不安があるから、何かもう子育てが怖いというか、どうしたらいいのかわからない、一人で悩んでしまうという形になってしまうんですが、その点ですれば、本当に武雄市に子育て総合支援センターとキッズステーションを早速に開設していただいたということは、もう本当にこれは大きな基盤整備だったというふうに思います。

きのうも上野議員のほうから、また年齢の拡大というか、そういう形で出ておりましたが、市長も新市長になられたときで覚えていらっしゃると思うんですが、武雄市には本当に子育てを考えていく、子育てのサークルの会がたくさんあります。その会の代表の人たちが、武雄市の子育ての環境を考えようということで提言書をつくられました。子育てしやすい環境づくりを目指してということで、まとめは、これは18年10月にできているんですが、これをもって市長と語る会で、私たちは武雄市にはこういう環境が欲しいんだという提言書をつくられました。本当にこれはゼロ歳から18歳までの子どもさんを持つ親御さんとかのアンケートをとりながら、きれいにまとめてあります。そして、具体的な提言として、１番目、武雄市の中心に児童館、児童センターを置くという提言がありました。そして、２番目、子どもたちの健やかな育成を図るため、公民館（各町の公民館や自治公民館）に子どもの居場所をつくる。３番目、武雄市行政の中にこども課（仮称）の設置ということで提言をされて、私も議員になってから福祉文教委員会だったんですが、福祉文教委員会の議員さんたちと武雄市の子育て環境の状況をですね、意見交換もいたしました。そういう要望があった後に、本当に市長に頑張ってもらって、きのうの小城市のゆうゆうというんですが、子育て支援センター、もうみんな本当にこういう活動をしている人は、平成15年の５月にあそこは開設しているんですが、みんなあそこには何回も何回も行って、勉強しているわけですね。武雄市にこういうのが欲しいって。でも、これが児童センターとしてはかないませんでした。本当に市長も精いっぱい受けたかったと思われるんですが、やっぱりいきなり建物の件もあるし、いろんな問題もあって、北方の保健センターを利用して、乳幼児向けというか、総合支援センターとして開設したわけですよね。

本当にこの支援センターがですね、きのうから話になっておりますが、すごくいい活用になっております。きのうもお話は聞かれたと思いますが、この支援センターを、丸２年たちましたが、どのように市長も感じておられるかということと重なりますが、これをどのよう

に次にステップアップさせていくかというところの意見を聞きたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

子育て総合支援センターは、私も北方の方向に行ったときに、寄れるときは可能な限り寄るようにはしていますけれども、やっぱり運が悪いですね、私が行ったときには余り人がおんされんですもんね。それで、ちょっと私、今思うのは、事務方がアンケートをとっているんだったら、答弁を後で変更させていただきたいんですけれども、きちんと一回アンケートをとろうかなというふうに思っています。それは、利用者の方のアンケート、そして、全然利用者になっていない方で使ってほしいなという世代の方々のアンケートを含めて、きちんととる必要があるだろうというふうに思っています。その上で、いろんな声を聞いて、施策に反映をしていきたいと。

今私が伺っているのは、先日の上野議員のように、世代をもう少し上げてほしいという、これはほかの方からも聞いておりました。あるいは、もう少し親御さんの、例えば、講座ですよね、子育て講座であるとか、これはやっていますけれども、料理ですよね。キッズキッチンと我々言っておりますけれども、そういったことの拡充であるとか、幾つか私のほうにも直接、間接に声が届いておりますので、一たんちょっと整理をさせていただければありがたいなというふうに思っております。

今のところ、中原所長さんを中心として本当によく動いていますので、あと実際にキッズサポーターの皆さんたちの意見もきちんと聞いていきたいなというふうに思っております。そして、みんなで、何というんですかね、武雄の子育て総合支援センターが本当にいい方向になるように努力をしていきたいなというふうに思っております。

以上です。

○議長（杉原豊喜君）

藤﨑こども部長

○藤﨑こども部長〔登壇〕

総合支援センターの利用につきましては、先ほど市長のほうからアンケート等と答弁がありましたけれども、アンケート等とっておりますけれども、ちょっと資料を持ち合わせておりませんので、アンケート結果については、議員に後で報告させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

本当に、残念ながら利用しているときに市長はなかなか居合わせていらっしゃらないよう

ですが、この間インタビューじゃないですが、ちょっと行ってみたんですね。そしたら、赤ちゃん、乳幼児さんですよね。で、ちょうどお昼御飯を一緒に食べる時間だったんですが、ちょっとオーバーかもしれませんが、涙を浮かべるぐらいに、ここのセンターがあって本当に助かりましたということでした。何か自分たちが育児ノイローゼになりかけていたときに、こういう場所があったということは武雄はすごいいい環境ですねということを何人もの方が言っていただいて、私も、ああ、早速市長にそういう言葉はお伝えしますねということで言ってきました。そしたら、もう一人の方は鹿島のほうから来てあったんですね。ここは市外の方も受け入れてもらってうれしいと言って、この人は親御さんとの同居でなかなかうまくコミュニケーションがとれなくて悩んであって、ここに通ってきて、本当に元気になったということをお話しされました。かなりここのセンターはいい役割を果たしているなということを感じて帰ってきました。

きのうもありましたが、平成19年が延べ人数で１万1,000人、平成20年が２万人、平成21年度まだ何カ月ですか、１万3,000人というふうに利用者が本当にふえているわけですね。あと登録数というか、どれぐらいの人数があるんですかというと、大体１年間で、来た人にはみんなお母さんも子どもさんも名札をつけるんですね。おばあちゃんが連れてこられる方もいらっしゃるそうですが、それは１年間来られなかったら抹消されるそうですが、その登録数が武雄で190人です。朝日町で53人、橘で18人、東川登で８人、西川登で６人、北方で91人、山内町で24人、若木町で７人、武内で12人ですね。それで、市外のほうが161人です。ほかのセンターは、市外は受け入れていないというところもあるみたいですが、そういう形で見れば、本当にここのセンターがですね、あと市外から来ている人は実家が武雄だとか、そういう形もあるらしいですが、大変いい役割を果たしているなというふうに思っております。

ステップアップしてというアンケートをとった結果でとかも言われていますが、やはり武雄の人で190人ですね。考えてみれば、ああ、武雄にまた新しくセンターができたら、そのときは小学校、中学校までの児童館も併設、高校生まで受け入れられる児童センターの形ですね、そういう形でまた開設されると本当にいい形の子育てのしやすい武雄の基盤ができていくんじゃないかなというふうに思っております。

まずここが、転勤族だったりお嫁に来たりといって、最初に悩んで本当に人のコミュニケーションができない人たちがまずここで元気になるところなんですよね。それと、安心・安全に遊べる場所ですよね。心の交流の場ですね。子どもは群れで育つというふうにして、子育てを教えていただきますが、今本当に自分たちの家の周りを見てもわかるように、子どもが群れになるというのが本当に難しい状態ですね、少子化で。だから、新しい形でこの支援センターというのは、本当に武雄の子育て環境をいい形につくっているものだというふうに思います。

キッズステーションも全然関係なくして自由に行ける場所ですね。だから、お友達同士があそこで誘い合って半日遊んだり、一日遊んだりしています。そこも、もうそこに参加している人の話を聞いても、とても喜んでおられます。火曜と木曜日だったですか、週２回ぐらいサポーターの方が入って相談役をされるわけですよね。

ちょっと私もうっかりしていたのが、２年間開設して、その部屋はよく私は議会中、上野さんと休憩場所にちょっと座ったり、時々出かけたりするんですが、この庁舎が古いわけで、本当にうっかりしていたんですが、最近お母さんがですね、子どもを連れて入るトイレが市役所にはないんですよということで、ああ、それは本当にうっかりしていましたということで、１階のトイレが今どき珍しいわけですよね、子どものホルダーというか、トイレ、ベッドとか、そういうのがないトイレになっているわけですね。だから、ああ、それは要望しておきましょうねという形で、本当に大きく見落としていたところがありました。じゃあ、まずそれに関して市長の答弁をお願いいたします。

○議長（杉原豊喜君）

藤﨑こども部長

○藤﨑こども部長〔登壇〕

ベッドの件ですけれども、議員からそういうふうなことをお聞きいたしましたので、すぐに管財のほうとも話をして、そこに子ども用の――身障者のほうのトイレも中にはちょっと、サイズがちょっとかなということでありましたので、まずは移動式の幼児用のベッドを入り口に設置するように今話をしているところでございます。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

トイレを見ましても、やはりちょっと狭いですもんね。私は本当になるだけお金がかからないように、障がい者トイレというところを兼用して、そこにベッドを置いてもらったら、障がい者のトイレは女性が入っても男性が入っても別にいいわけですよね。だから、そういうところが併設しやすいかなというふうにも思いました。

あとやっぱりお母さんから離れるということで、子どもがギャーギャー泣いて、まだ歩くことができない子は、本当におトイレするときに困るから、そういうホルダーとかベッドがそばにないといけないわけですね。普通のトイレでしようと思ったら、やっぱりそれはトイレの外にベッドを置かないといけないですね。だから、ちょっとそこら辺は障がい者用のトイレとかはですよ、ぐあいを見てしていただきたいなというふうに思います。市長、答弁ですか、お願いします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

確かにいい案をいただきました。気になっていたことが、こども部長から答弁がありましたように、スペースの問題であるとか気になっておりましたので、障がいをお持ちの方の専用のトイレにね、例えば、ホルダーであるとか、ベッドが置けることが、これはあと制度上の問題もちょっとありそうですので、それがきちんとクリアできるようにしたいなというふうに思っております。夢を形にしていきたいというふうに思います。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

このトイレの件でもう１つ補足させていただきますが、今はもう男性用に子ども用のトイレが要るわけですよね。というのは、もう今若い子育て中の方は、お父さんがおんぶしたり抱っこして子どもを見るわけです。そのときに男性の方が、本人が一番困るのがやっぱり子どもを見ていて、おトイレに行くときが男性用にそれがないということで、今は新しく建物が建っていくときに、男性のトイレにもホルダーというか、子どもを置けるホルダーとかベッドとかを備えることが、もうそれは当たり前になってきているそうですので、何か機会があれば、そういうこともお忘れなく設備していただけたらなというふうに思います。ということは、男女共同参画じゃないですが、本当にみんなで子どもを育てていくという形になっていくんじゃないかと思います。

あと、私が本当にいろんなマニフェストを見て、お金は切りがないと思いますね、本当にお金は欲しいと思います。幾らあっても子育て支援をたくさんつけていただきたいと思うんですね。だけど、この間ちょっとテレビであっていた若い夫婦の話を見ていると、４カ月の子どもを抱えて、どこも預けるところがないと言っている御家庭の家計簿とかを見ると、本当に家のローンに一月16万円払うとか、車のローンとか、そういう形で生活が厳しいから共働きをしないといけないとかという形で、私たちが子育てしてきたころは、まず子育てだったと思うんですね。だから、何か携帯とか、いろんなゲームとかいろんな、子どもを育てていく中に、ぜいたく品ではないですが、そういうことが優先されるんじゃないかなという、ちょっと古い者の考えかもしれませんが、やっぱり子どもを優先にして、子どもがしっかり育つ環境を武雄市も一緒につくっていただきたいなと思います。

それには、やはりゼロ歳から３歳までは安心して家族、家庭、地域、周りで見られるような環境をつくっていただいて、特別なことがない限り、できるだけこの３歳というのは、親も親業の時期なんですね。自分も４人育ててきて失敗だらけだったんですが、本当に大変な経験をします。もうギャーギャー泣いて、何で泣いているのかわからないし、本当にさっきじゃないですが、病気のときは自分も泣きたくなるし、歩いてちょろちょろするときにははらはらして追いかけたり、３歳までは本当に親業をさせていただくんですね。それと、３歳

までが一生分の親孝行、子どもは親孝行するというふうに、いろんな変化があって、もうけらけら笑って反抗もしないし、一番かわいい時期を過ごすわけですね。だから、その時期をぜひとも親御さんがかかわれるような、この武雄市の子育て環境をつくっていただきたいなと思います。それにはやはり育児休暇とか、企業の方も本当に今厳しいんですが、女性も男性も育児休暇とか子育て休暇をとったときに、安心して戻れる、復帰できるような環境ですね、そういうことを望みたいんですが、市長どのようにお考えでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

２つあると思います。１つは、私は市役所の長でもありますので、武雄市役所の職員の皆さんたちが安心して、そういう子育てができるような環境を整えるということは、任命権者としての最低限の仕事だと思っております。それと、私は武雄市を代表する者といたしまして、武雄市の企業の皆さん、団体の皆さんたちが子育てをしやすい環境を整えていただくと、そういう啓発の広報をきちんとすると。それに応じて、これは国、県、市一緒ですけれども、それに対する支援をきちんと行っていくということがあろうかと思います。

今、本当に難しくなったなと思うのは、私の両親は共働きでありました。そのときに３世代同居でありましたけれども、よく小柳議員もお見えになっておりましたけれども、３世代同居のときに、両親はいなくても、うちのじいちゃん、ばあちゃんは農家をやっていましたので、いつも一緒に行きよったわけですね。ですので、あの当時が本当に子育てをするに当たって、あるいはされるに当たって一番いい環境だったのかなというふうに思っています。やはり家族が一番大事だと思っていますので、そういう意味で、別にこれは３世代同居を勧めるわけでもありませんけれども、そういう昔の古きよき日本というのが、本当に何か支援とかなんとか、行政的な、ちょっと異なる観点かもしれませんけど、そういう環境をきちんと整える必要があるのかなというふうに思います。

それとちょっと外れますけれども、お寺です。私はやんちゃでありましたので、よくお寺に預けられたりとか、お寺で遊んで、池に和尚さんからほうり投げられたり、いろんなことをしました。今考えると、お寺が子育ての一つの環境になっていたんだなというのをすごくよく思って、これはちょっともう数カ月前に出た岩波新書の「寺よ、変われ」という本の中にもいみじくもありましたけれども、今後――これはちょっと言い過ぎと言われるかもしれませんけど、お寺の活用――活用と言ったら失礼ですけど、お寺が昔持っていたコミュニティーの場として、まちおこしの場としてもう一回見られる。ただ、お寺の住職さんも今大変な思いをされておられます。ですので、それを押しつけるのではなくて、もう１つ社会的意義を一緒に再発見できて、お寺の皆さんたちを支援できるのがあるんではないかなというのを岩波新書の「寺よ、変われ」という本を見ながら、率直にそういうふうに思いました。

以上です。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

そうですね。お寺もよく私の知ったところでも土曜学校とか、そういうことを復活させて、子どもたちのかかわりをしてあるところもあります。あと支援センターのセンター長とお話をしたら、そこで元気になったお母さんたちとか、また、やっぱり来れない、なかなか橘とか東川登、西川登、山内もそうですが、来たくてもそのセンターに来られない人ですね、を公民館を主体に支援をする子育てチームというか、サポーターの人に参加してもらって、そういう公民館を居場所にすることも発展して、今それがとてもいい形になっていますということ言われています。

武雄市には、子どものための情報たまてばこ「ゆうぽっぽ」というのがありますが、それの７月号にも、各公民館で子どもたちの体験、かかわりというのをやはり一番大事にと思ってある、それが主になっていると思うんですね。すばらしい体験活動が予定されています。ここに全部紹介されています。山内なんかは「かしの実サークル」という形で、大体おじいちゃん、おばあちゃんが子どもを見るような形のサークルがあっています。それから、こういうところで子どもたちにしっかりと体験と交流をさせるということが一番基本的な子育てにつながっていくんじゃないかというふうに思います。

私の好きな言葉でインディアンの話というか、言葉で、１人子どもが生まれたら、１人の子どもを育てるのに100人の村人が要るというふうに伝えられているんですね。本当に人と人のかかわりの中で人は育っていくということを一番大事にしていただきたいなというふうに私は思います。

山内、武雄の子育て環境も、本当にこういう基本的基盤をしっかりと立てていただいたら、私たち何回も子育てに失敗しながら子どもを大きくしてきたんですが、そのお母さんたち仲間は、せめて３歳、小さいときにしっかりかかわっていたら、本当に思春期になるときにいろいろな問題が上がっても親としては余裕よねという形で、いつも子育てサークルの仲間は話すわけですね。だから、今からお母さんになる方、親になる方は、本当に小さいとき大変だけど、しっかりかかわるということが後から問題があったときに楽だよということを本当に伝えたいと思います。

本当にたくさんの失敗を繰り返しながら、たくさんの人とかかわって、体験をして、子どもが育っていくという環境に武雄市はますます力を入れていってほしいなと思います。

きのうも出ていましたが、「ゆうゆう三日月」は平成15年にできておりますが、図書館の「ドゥイング三日月」というのも話題になりました。ここも建つ前から、読み聞かせのチームのお母さんたちとかが建設委員会に入って、自分たちが本当に必要な図書館をつくり上げ

られたところです。そこから発展して、児童センター「ゆうゆう三日月」ができて、このときの実行委員は、小学生、中学生、高校生まで入れて建設実行委員会をつくっておられるんですね。だから、もう内容的には本当にすばらしいものです。たくさんのボランティアの方がかかわれる組織になっています。18歳、高校生がそこを去っていくときは、必ず卒業しても、大学生になっても、大人になっても、ここのボランティアに帰ってくるってセンター長さんが言われます。だから、こういう基盤が武雄にできると、中高生の居場所がないとか、本当にいろんな問題がありますが、すごくいい子育ての基盤になっていくんじゃないかというふうに思います。ひとつ情勢としても、このセンターができてから、この周辺は本当に子育てをしている方がわざわざ引っ越してこられて、人口がふえているところというふうに報告を受けております。そういうことで、ぜひともこういう環境づくりを市長にお願いしたいところですが、もう一度答弁をお願いいたします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

御答弁申し上げます。

三日月のゆうゆうは、ちょっと機会ができれば、すぐ見に行きたいというふうに思っています。なるべくそういう先進地の事例を取り込んで、多聞第一で取り込んで、施策に展開をしていきたいと思います。

ただ、今、牟田議員から質問がありましたけれども、財政状況が非常に厳しゅうございますので、あるものを活用していくという中に哲学、思想を取り入れていきたいなというふうに思っております。

いずれにいたしましても、今後、いろんな、例えばこれは民間も含めてそうなんですけれども、何かつくっていただくときは空きスペースをつくっていただこうかなと。これは病院にも要請しようかなと思っています。新武雄病院ですね。ですので、それがかなうかどうかは別にしても、そういうスペースを新たにつくるよりは、つくるときに一つのスペースを用意していただいたほうが、恐らく限界費用も安く済みますので、それはもう民間の方がつくられるときにもそういうことを押しなべて要請していこうと思っています。そうすると、もともと１等地にあるところに、そういう建物ができるわけで、その活用というのもすごくしやすくなるんではないかなというふうに思っておりますので、御意見を踏まえて、あるものを活用する、そして、何かつくられるときは、そういう公に資するようなスペースもつくっていただくように要請をされて、行政においてはそういうことを民間に全部押しつけるんではなくて、そういうスペースをつくっていただいた場合にはきちんと支援をするということも必要なんだなというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

本当に厳しい折ですので、あるものの活用というのは私も常々言っているところであります。それと、山内でも、どよう文庫とかも自分たちでボランティアの人をたくさん交えて、そういう居場所もつくっておりますし、今度、空き庁舎の活用で図書室を兼ねたそういう交流の場をぜひともというふうに、やっぱり新しくというのは、本当私たちもわかりますので、そこがいい居場所になるように、キッズステーションとかがあちこちにできたり、そういう形から始まっていっていいと思います。で、次にステップアップして高校生ぐらいまで交わる、縦のつながりがある、そういう居場所がまたできればいいかなというふうに思っております。

そしたら、次に２番目であります。市民の安心・安全に移りたいと思います。

災害時の危機管理についてですが、これもほとんどの方がたくさんきのうまで、きょうもでしたが、言っていただきました。本当に対応にはですね、今議会、話を聞いていても、すばらしい対応、行政の動き、消防団の動き、本当に私たちは武雄市に住んでいて、こんなに安心して住めることがありがたいなと思うほどすばらしい対応があったということがよくわかりました。

私もこの一般質問を出すに当たって、わからない部分とか、いろんな部分がありましたので、お尋ねしております。その件で、１つ２つお尋ねしたいと思います。

山内には余りそういうところがなくて、ちょっと気づかないんですが、今回、一般質問でもあったように、常襲地区と言われる、本当に大雨が降ったときにはすぐに危険地区というか、そういう場所があるようですが、武雄市の場合、大雨に襲われたときに常襲地の危険箇所というのが何カ所というふうに指定されているんでしょうか、お尋ねいたします。

○議長（杉原豊喜君）

大庭政策部長

○大庭政策部長〔登壇〕

お答えいたします。

常襲地区ということで特別に指定ということはしておりません。ただ、通常、常襲地区と言っているのは、ほとんどが冠水による被害地区でございます。で、これはもう冠水地区でございますので、雨の降り方で若干ことしは、ここはつからんやったけれども、次の年はここもつかったとか、そういったところを通常常襲地区と言っております。

今回の冠水による地区でございますけれども、床上、床下浸水したところでございます。武雄町で２地区ございます。中町区と永島区。それから、橘町で二又区、沖永区、鳴瀬区、片白区、南片白区、小野原区ということで６カ所。それから、朝日町で甘久区、高橋区、南上滝区で３カ所。北方町で焼米区、掛橋区、木ノ元区、高野区、久津具区、北方区の６カ所

で合計17地区が冠水被害を、こういったところは通常、常襲地域でございます。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

今回そういう冠水に襲われたり、そういう箇所が17カ所あったということですね。本当にこの話を聞いていて、その地区の方たちの連携とか、区長さんの働きとか、そういうところの対応が早くてすばらしかったということも聞いておりますが、今回私も聞き取りとかしていて、自主防災会という言葉がよく出てきました。私は余り聞きなれておらなかったんですが、この自主防災会という会は、どの地区にも備えてあるのか、それとも、今何カ所かというですね、今後こういう会をつくっていこうとされているのかお尋ねいたします。

○議長（杉原豊喜君）

大庭政策部長

○大庭政策部長〔登壇〕

お答えいたします。

自主防災会は、特に武雄市の地域防災計画の中でも大きくうたっていることでございまして、市内100％設立をしていただきたいということで進めておりますけれども、現在40地区で自主防災会が設立をしていただいております。今後、この自主防災会の設立については、我々も出前講座等を開きながら、それから、地区にも出かけていって、区長さん方と協議をしながら全地区での設立に努めてまいりたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

40地区ということですが、全体は何地区ぐらいあって、何％ぐらいになるんですか。

○議長（杉原豊喜君）

大庭政策部長

○大庭政策部長〔登壇〕

通常、行政区は107行政区ございますけれども、これは行政区の中でもいろいろ２つにできたりというようなことがございますので、全部するとなると相当な数になると思いますけれども、今40地区、ちょっと時間いただきまして申しわけないと思いますけれども、これは武雄町の川良ですけれども、山野上東、山野上西、山野上北、山口常会、三田常会、赤尾常会、三田南常会、舘常会と、川良だけでもこういった多くのところがございます。

山内のほうで申しますと、犬走、大野区、下黒髪、筒江婦人防火クラブ、この４カ所で現在設立をしていただいているところでございます。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

ありがとうございました。本当に今回の対応とか、いろんな話を聞く中で、予想を上回るというか、何が起こるかわからないような状況の中、こういう自主防災会というのが一番力になるんじゃないかなというようなことを感じましたものですから、ちょっとお尋ねしました。

それと、自分の地区の公民館も避難箇所というか、指定になっているんですが、上のほうの堤とかが決壊した場合は、そこは低いところにあるから、やっぱりそこは避難箇所にならないわけですよね。そういうときに、やっぱり一番区長さんとか、そこの地域の連携というか、そういうのが必要になってくるなという思いもありまして、やはりこういう自主防災会というのができ上がっていくことが一番のいい形ではないかというふうに感じました。

そしたら、次に行きます。

これは災害時の危機管理という形では、皆さんまず上げていらっしゃらないんですが、私は平成18年９月議会で質問させていただいておりましたが、古川知事のプルサーマル計画のことでお尋ねしておりました。佐賀県は、原子力発電を備えております。そのとき私は古川知事もこんな大変な問題を一人で決定するんじゃなくて、住民投票によってこういうことを決めたらどうかという形で、そういう形もお願いしておりましたが、安全だということで、この３年間過ぎましたが、状況が物すごく大きく変わってきています。この３年間で。やはり温暖化による、異常気象が世界で起こっておりますし、日本でも驚異的な竜巻とか、ゲリラ豪雨、それに８月11日の静岡の地震、震度６弱など、何が起こるかわからないような状況になってきておりますところ、やはり佐賀県としては、もしこういう事故とか災害があったときに、私たち武雄市はどのようにして守られるのだろうかということを樋渡市長にお尋ねしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

大庭政策部長

○大庭政策部長〔登壇〕

原子力発電、プルサーマルの災害対策でございますけれども、これにつきましては、原子力施設の防災対策ということで、原子力施設の種類ごとのＥＰＺ（エマージェンシー・プランニング・ゾーン）ということで、防災対策を重点的に実施すべき地域の範囲というのが示されているところでございます。このＥＰＺでは、原子力発電所において十分な安全対策がなされている以上に、またあえて技術的に起こり得ない事態までを想定して、十分な余裕を持って原子力発電所からの距離を定めたものというふうに言われております。

目安として、発電所から約８キロメートルから10キロメートルの範囲の中で、このＥＰＺが策定をされておりますけれども、このことからしますと、県内で原子力災害対策計画が策

定されているのは玄海町と唐津市の１市１町でございます。武雄市は直線距離でいきますと、約30キロメートルということで、この策定については義務づけられておりませんが、万が一の緊急時には国、県の指示に従いながら対応を図っていくということになろうかというふうに思います。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

国、県の指示を受けてというところが一番問題だと思うんですが、本当に今度プルサーマル計画が始まりますと、普通の原発の事故より被害の面積が４倍になるとも言われておりますし、本当に異常気象を思うとき、想定外という形は本当に避けられないと思うので、ぜひとも私は武雄市民の安心・安全を守っていただきたく、樋渡市長は武雄市民をですね、シェルターがあるわけではないし、どういう形になるんだろうと思って質問したところです。

佐賀県議会の６月議会で、プルサーマルで事故が起きた場合の責任をどうとるつもりですかという質問で、一番ちょっと気になったのは、県議会で決まったことなので責任はとりませんと答えられた古川知事の言葉が、私は一番気になったんですが、市長はどうお考えでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

古川知事の県議会におけるその発言というのは、すみません、ちょっと確認しておりませんので、この場でそのコメントは差し控えたいと思っておりますけれども、よく考えてほしいのは、もしプルサーマルの計画がない場合に２つ問題点が出てくると。１つが、これは非常に資源を、燃料をリサイクルして、できる限り有効利用するというリサイクルの観点で、CO_2の排出量が非常に少ないということ。

それともう１点、これはもっと大きな話ですけれども、今の電力需要です。50年ぐらい前の電力需要であったとするならば、プルサーマルはなくてもいいのかもしれません。しかし、これだけ生活が豊かになって企業活動が旺盛になった場合に、プルサーマルのこの電力供給がない場合には、例えば、夜間の省力の電力供給ができなくなるといったこと。そうすると、夜間は我々クーラーばつけられんごとなるわけですね。ですので、恐ろしく生活のレベル、質を３分の１ぐらいに下げなきゃいけないということは、私は直感的にそのように思っておりますので、そういう意味からすると、今の電力需要を考えた場合には、私はプルサーマル計画というのは理解はできます。その上で、これは山口裕子議員と同じですけれども、安全確保を大前提にしていただくと。山口裕子議員は、安全確保を大前提とするならばプルサーマルは要らないという御判断かもしれませんけど、私は先ほど申し上げた前提条件からする

と、安定確保を大前提にぜひこれは実施をする必要があると、実施すべきだという認識に立っております。

もとより、これは市内部で統一した見解ではありません。一部分は、私の政治家としての価値判断で申し上げた次第であります。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

まず、この３年間でいろいろな状況が変わってきております。市長のおっしゃることは本当にわかります。私だってこれだけ自分も便利、快適な生活をしていて、電力に頼らないわけにはいかない生活になってきております。しかし、今、世の中の状況が、佐賀県は、政府ももちろんですが、太陽光発電への補助金制度を復活させましたよね。余剰電力の買い取り価格をまたこの秋から２倍に引き上げる方針を打ち出しております。そして、本当にできるだけ自然エネルギーとか、そういう形でいこうというのを打ち出しておりますし、佐賀県は、この住宅用の太陽光パネル設置の全国第１位なんですね。そこのところも考えて、佐賀県はどのような方向でいくかというとき、やはり私は本当に一番市民の命、安心・安全を最優先してもらって、できるだけ自然のエネルギー、本当にぜいたくざんまいをして、後に、次世代に不安を残すことのないような形をお願いしたいなというふうに思って、この３年間で変わった状況を言って、できればいろいろ変化が出てくるんじゃないかなというふうに思っております。

あと、佐賀県も武雄市も――佐賀県って武雄市なんですが、本当に自然の宝庫ですよね。食物も大体100％ちょっと切っていますが、自給できていますよね。本当に豊かな農産物と、武雄だって3000年の巨木のまち、あと黒髪山系の自然の豊さ、こういう形を永久に残していく、永続可能な生活ができるのを私は市長に政策として残していっていただきたいなという思いがありまして、ここで質問させていただいております。

本当に今回の水害とかではパトロールとか、いろんな形で完全に市民の安全を守っていただきましたので、本当にひとつ不安があって私はこの質問をさせていただきました。ぜひとも、やっぱり未来の子どもたちに、私たちが今ぜいたくざんまいの生活をして、本当に不安とか限りある資源を枯渇したような形では残されませんので、ぜひとも自分たちが自粛することによって、この計画は要らないんじゃないかとか、そういう形が出てくるんじゃないかと私は思いました。

経済産業省はプルサーマルの実施を受け入れて、同意した道県にそれぞれ60億円を払う交付金制度を本年３月末で打ち切っています。打ち切ったということは、今後プルサーマルにどうしても交付金を払われませんので、この方針でいかないといけないという形だというふうにもとれるわけですね。

あと、プルサーマル計画をしていた16カ所、18基の計画が、残される玄海と伊方と浜岡の３カ所だけになっていたわけです。でも、最近また大きく変わりまして、伊方の原発は耐震基準の見直しが済むまではＭＯＸ燃料の装荷は認めないと知事が言っています。そして、８月11日に震度６の地震に見舞われた浜岡原発は停止をしました。残る佐賀の玄海の原子力発電だけになったわけですね。だから、３年間でこのような状況の変化があっておりますので、ぜひとも安心・安全の佐賀県づくりというか、そういう形で一緒に樋渡市長も市長としてつくっていただきたいという切なる願いがあるわけです。ぜひとも市長は、今回、武雄市民病院を、本当に民間移譲という形で武雄市民の命、安心・安全を最優先していただきました。私も本当にそれは賛成でした。でも、それは大変なことだったと思います、リーダーとしてですね。古川知事もリーダーとして、これは本当に大変な決断をされたことと思います。でも、今から状況がどんどん変わってきます。３カ月前の６月の議会と今議会とは政権も変わりましたが、本当にごろっと変わってきます。環境も変わってきます。それに対応できるようなリーダーになっていただきたいと思うんですが、市長そういう形の見解をお聞きしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私はまだまだ非力で微力であります。自分の存在の小ささをかみしめることも多々あります。そういった中で、私はお願いがあるのは、これをごらんになっている市民の皆さん、そして、先輩の――私からすれば皆さん先輩であります。先輩の議員の皆さんに御指導いただきながら、私自身も成長して、そして、市民の皆さんとともに歩んでいく行政、政治を行ってまいりたいと思います。

もとより非力でありますけれども、先ほど出馬の表明をいたしましたが、皆さんとともにまた歩んでいきたいと、このように思っております。いろいろ教えていただければありがたいと、このように思っております。

○議長（杉原豊喜君）

３番山口裕子議員

○３番（山口裕子君）〔登壇〕

本当に市民病院の件もそうですが、やはり市民の命、安心・安全を守っていただく市長と、私たち議員もしっかりかみ合っていって、一致団結で今から乗り越えていかないといけないところだと思います。私ももちろん、これはどうだろうか、あれはどうだろうかといろんな形で勉強をして、次世代に本当にいい社会を残してくれたというような形で、次の世代に受け継いでいくことができたらなというふうに思っております。一般質問の１日目、やはり市長も次の世代のために我々も少し我慢をして、次の世代のことを思って暮らすという明治の

精神をちょっと言われました。私たちも、あれも欲しい、これも欲しいとか、そういうことも少し自粛しながら、本当に新しい時代を切り開いていかないといけないんじゃないかなというふうに思います。やはり永続可能な社会という形を、私は命をはぐくむ女性として、子どもたちに本当に安心して暮らせる社会を残したいと思います。これからもいろんな判断をしていかないといけないときが来ると思いますので、ぜひとも市長はそういう形で判断のときにはいろいろなフライングがあったり、いろんなミスもあったりすると思います。状況も変わってきたりすると思いますが、そのときは本当に素直に市民のことを第一番に考えて選んでいってほしいなというふうに思っております。これで私の一般質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○議長（杉原豊喜君）

以上で３番山口裕子議員の質問を終了させていただきます。